牧山佐藤先生碑　　東宮侍講正五位勲四等文学博士　三島 毅　撰

先生姓は佐藤氏、諱は楚材、字は晋用、牧山・雪齋は皆な其の別字なり。

尾張中嶋郡山崎村の人なり。　父は太四郎と曰い、母は富田氏。

先生幼くして頴敏、読書撃剣を喜む。

剣の師曰く、人の身を立つるは一技に在り、多岐なれば即ち亡羊すと。

先生感悟し、此自り一意斯学に従事す。

鷲津松陰に丹羽に、河村乾堂に浪越に就き、勉励すること数年、郷黨に傑出す。

年十九、江戸に遊び昌平黌に入り古賀侗庵・依田匠里を師とし、傍に松崎謙堂に学ぶ。

学資或は継がず。

昼は則ち人の為に傭書し、夜は則ち刻苦誦読し、往々にして徹暁目を閉じず。

人目するに鰥魚を以ってす。

昌平勤学を以て称せらるる者　前後三人、　先生其の一に居る。

学大いに進み、年二十五、居を駒籠に卜し徒に授け、名頗る著わる。

尾張僖公之を聞き、召して儒官に列す。

懿公侍講に任ず。玄同公深く之を信じ、礼遇すること甚だ渥く、小納戸格より物頭の班に陞し、講後問うに国事を以ってす。　公の治績、先生の啓沃与かりて力有り。

既にして藩邸弘道館督学に任ぜらる。

幾くも亡く命ぜられて尾張に帰り、藩校明倫堂督学の事を行す。

明治の初め藩廃せられ、帷を城南に下す。

四方より来り学ぶ者雲集し、其の名大いに揚る。

文部省硯及び六国史を賚いて之を賞す。　晩年東京に移住し、斯文会講師に属せらる。

二十一年先生年八十八、門人故旧相謀りて寿宴を設く。

会する者百余人、清儒兪曲園等詩を寄せて之を賀す。

二十四年二月十四日病みて終る。

生享和元年八月一日を距たること寿九十有一なり。牛籠原街の専念寺の塋に葬らる。

前配吉田氏一男を生け、後配篠氏一女を生むも、皆夭(よう)す。

同藩同姓の友政の子雲韶(うんしよう)を養い祀(し)を奉ぜしむ。先生の人(ひと)と為(な)り方正謹飭(きんちよく)、居るに常に危坐(きざ)し、縹(相)中赫(かくしよ)暑金を爍(とか)すも亦た容(よう)を動かさず。人に接するには楽易(らくい)にして圭角(けいかく)なく、循循として勧誘(かんゆう)して倦(う)まず。　事に臨みて明敏善く断ず。

又た能く人の言を納れ、幡然(はんぜん)として改善し、少しも吝(やぶさ)かならず。

初め古学を修め、弱冠にして洛閩(らくびん)を知りて正宗(せいそう)となし之を奉ず。

四子六経究めざる所莫(な)し。尤も易・中庸に邃(ふか)く、周易叢説(しゅうえきそうせつ)・中庸講義(ちゅうようこうぎ)を著(あらわ)す。

傍(かたわら)に諸子老荘韓非に通じ、皆な成解有り。

而(しこう)して玄同公老子を好み、命じて講義を作らしめ、恒(つね)に座側に置く。

征長の役も亦た齎(もたら)し往く。後、先生に謂いて曰く、余陣中にて事を處するに多く此に依ると。先生又た嘗(かつ)て曰(いわ)く、老家は気を主とし、儒門は理を主とす、古今の学術は二者を出でずと。又た和漢の史乗(しじよう)に明らか、史記律書に訛謬(かびゆう)多きを見、律書私記を作る。清史未だ備(そな)わらざるを病み、清朝史略を編(あ)む。

文辞も亦た典雅淵粋(てんがえんすい)、儒者の作に負(そむ)かず。

牧山樓詩文鈔、其の他韻法字書、医方星象、浮屠(ふと)の著有り。

泰西(たいせい)の書も渉猟(しようりよう)せざる所莫(な)し。

年耄(もう)を踰(こ)えるも、目耕肘書(もつこうちゅうしよ)、夙夜孜孜(しゅくやしし)たること、少壮の時に異(こと)ならずと、云う。

頃者(さきごろ)雲韶人を介して狀を寄せ、碑銘を速(うなが)す。余、先生と一再斯文學會に相見ゆるも、未だ底蘊(ていうん)を叩(たた)くに及ばずして永訣す。今、状を讀み傾服して己む能わず。

乃ち銘を作りて曰く。

貧にして学に勤む　　于嗟匡衡(ああきようこう)

博にして純正　　于嗟考亭(こうてい)

老いて講習　　于嗟伏生(ふくせい)

世儒泛駁(ほうはく)　　學べば則ち厚からず

浮名實無く　　奚(なん)ぞ不朽を期さん

于嗟先生　　書を萬壽に遺す

明治三十四年二月　　福岡欽崇書